



Title	17世紀におけるIndoamericanismo受容の一側面について
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1997, 21, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93827
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

17世紀におけるIndoamericanismo

受容の一側面について

中 岡 省 治

1. 17世紀は、イスパニアがその個性を研ぎ澄ました時代であり、時のヨーロッパに向けてその存在を再認識させた時代である。この段階では、イスパニアがそれまで集積したエネルギーを多面的に放射し、言語史、文学史でも多くの傑出した学者、文学者を輩出している。こうした充実感は、一方では、新大陸の発見とそれ以後の植民活動の中心的存在としての自信ともあいまって、イスパニア人の世界観、価値観を大きく転換させることにもなった、と思われる。しかしながら、この新大陸の発見という世界史的な大事件が、時の言語研究の領域や文学活動の面には、予想されるほどの大きな反響を及ぼさなかったように、みえるときがある。

たとえば、その生涯に1,700点もの劇作品を書いたと豪語するかのイスパニア国民的劇作家 Lope de Vega も、新大陸を主題とする作品は、知られるかぎり、わずか数点である。これに続く、Tirso de Molina (1579-1648), Calderón de la Barca (1600-1681) についても、その新大陸を主題とする作品は、まったく少数であり、これら三大劇作家のアメリカに対する冷淡さ・関心の低さは、なぜか謎として残っている。

言語研究の分野でも、17世紀初頭に Sebastián de Covarrubias y Horozco (1539-1613) が、*Tesoro de la lengua castellana o española* (1611) を出版した。これは、当時のイスパニア語の語源の記述を目指す大辞典であり、あわせて、新造語、古語、外来語、俗語、韻文用語の分類基準を導入して、語彙の分類を試みるなど、18世紀のイスパニア王立言語アカデミアの国語辞典編纂のモデルにもなった、といわれるほどに重要な文献である。あわせて、この辞典は、時の風俗・習慣についての豊富な情報をも収録していて、黄金世紀のイスパニア研究にとっては不可欠な事典でもある。しかし、この辞典（以下、*Tesoro*とする）は、見出し語をAの項目だけでも、1468語と

する大部のものであるのに、アメリカ原住民語を起源とする語形式でイスパニア語に取り入れられ、イスパニア語の語彙の一部となるもの（これを以下 *indoamericanismo* とする）は、そこには、わずか 23 語しか収録されていないようである(1)。

ここでも、前述の劇作家の場合と同じ現象がある、という のだろうか、とくに、以下では、これに関連するいくつかの事実を取り上げて、なぜ *indoamericanismo* がこのような取り扱いしか受けられなかったのかを、考えてみたいと思う。

2. いうまでもなく、イスパニア語の *indoamericanismo* 受容はコロンブスの記録から始まる。彼は、その『航海日誌』で新大陸原住民から取り入れた最初の語形式として、*aje, ají, bohío, cacique, canoa, cazabí, guanín, hamaca, nitayno, nocay, tiburón, tuob*を挙げている(2)。このうち *canoa* は、時を移さず、Nebrija の *Vocabulario de romance en latín* (c. 1495) に、見出し語の一つとして収録されることになる。

それ以後の新大陸に関する記録、文献の中に数多くの *indoamericanismo* が導入されていくが、その数や語彙の意味領域は、記録者や著者の関心、教養、観察力の違いによって、相当に異なった現われ方をする。そのうち初期のいくつかの記録をみると、Gonzalo Fernández de Oviedo, *Historia general y natural de las Indias* (1535) ではほぼ 400 語、Alonso de Ercilla, *La Araucana* (1569) では 20 語ならず、Juan de Castellanos, *Elegías de varones ilustres de Indias* (1589) では 155語が、José de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias* (1590)では 200 語近くが、それぞれに、用いられているといわれる(3)。

3. 上記のようなアメリカと直接に関係する分野以外では、これらの *indoamericanismo* の受容はどのような状況にあったのだろうか。Lapesa によれば、イスパニアにおいては、前記の Lope de Vega は 80 語を使っているが、そのうちアメリカを主題とした劇作品中に限ってみられるのは 30 語だけ、となっている(4)。すでに新大陸発見の後一世紀以上をも経た段階では、当然のことながら、かなりの数の *indoamericanismo* が、新大陸そのもののイスパニア語だけでなしに、イベリア半島のイスパニア語にも馴染み、

もはや違和感のない語彙として定着していたものと予想される。事実、原住民語に由来する語が、新大陸の新しい事物の実体を表現する場合だけではなく、文学作品の中で、すでに特殊な共示のもとに使用されている場合もあって、これは、当時のイスパニア人の新大陸への感覚を表わす興味深い現象といえるであろう。たとえば、次のような場合である。

(...) ; que el primer tropezón le valió más de cuatro mil ducados, con un rico *perulero* que contaba el dinero por espuestas. 「その最初の踏みはずしは彼女には四千ドゥカド以上もの稼ぎになったが、これはかごで金をすくって数えるようなそんな金満家のパール帰りからせしめたものだった」 (Mateo Alemán, *Guzmán de Alfarache*, *Clásicos castellanos*, No. 73, 1960 ; p. 99).

Donde tenían una balsa de maderos, y atados unos con otros con fuertes *bejucos* y flexibles mimbres. 「彼らは材木のいかだを作っていて、その材木はお互いに丈夫な蔓とよくしなる柳の枝でしばり合わせてあった。」 (Miguel de Cervantes, *Obras completas*, Aguilar, 1965, p. 1529)

Fuera yo un Polifemo, un antropófago, un troglodita, un bárbaro Zoilo, un *caimán*, un *caribe*, un comevivos, 「この私が、ポリフェモスのように、人喰い人種に、穴住人に、野卑なゾイロスのように、アメリカワニのように、カリブ族のように、人喰い人間になれたらいいのに」 (Miguel de Cervantes, *Id.*, p. 548)

(...), que el mosqueo de las espaldas, ni el apalear el agua en las galeras, no lo estimamos en un *cacao*. 「背中に食らうむち打ちも、またガレー船で水を打ちたたくことも、我々には、そんなことはなんでもないことだ。」 (Cervantes, *Novelas ejemplares*, I, *Clásicos Castalia*, 120; p. 123.)

これらの五語のうち、第二例の *bejucos* は、紐材としての当時の新素材に言及する場合だが、その他の語、*cacao*, *caimán*, *caribe*, *perulero* については、文脈からも明らかなように、「つまらないもの」、「野蛮で恐ろしいも

の」,「成り金」といった類の含意がそこに加えられている。

これは、当時のイスパニアにおける新大陸のイメージの一面を物語るものの、といえるであろう(5)。

4. こうした側面をもちつつも、イベリア半島のイスパニア語に *indoamericanismo* が取り入れられていくが、この語彙形成の過程をみれば、そこにはいくつかの時間的な段階があった、といわれている。このうち、最初の一群をなすものが、発見・植民の第一段階に当たるアンティリヤス期に形成されたものであり、その地理的中心はサント・ドミンゴ島、つまり今のエスパニョラ島、であったと考えられている。

これらの語は、Cuervo によれば、上記のコロンブスの『航海日誌』に挙げられた語をも含めて、以下のようにになっている(6)。

そこで、以下では、これらの語が 16 世紀の記録でどのように扱われているかを、確かめてみようと思う。この確認作業の対象には、主として Gonzalo Fernández de Oviedo, *Historia general y natural de las Indias*, BAE, 117 (I)-121(V) を用いた。また、ここで適当な記述が見つけれなかった項目では、José de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias*, BAE, 73; Fray Bartolomé de las Casas, *Obras completas*, Alianza Editorial のうち、*Historia de las Indias* と *Diario del primer y tercer viaje de Cristóbal Colón* を参照した。

(なお、各項目の説明の抽出にあたっては、その表わす実体の内容を、直接にしかも具体的に説明している、と思える部分に限った。いうまでもなく、対象とした文献はどれもが、各項目について何ページをも割いて、詳細な記述を残している。また、以下、出典については、上記 Gonzalo Fernández de Oviedo と José de Acosta の場合だけは、それぞれ、Oviedo と Acosta とし、その他の場合は本稿末尾の参考文献リストの表示に従った。)

ají: *Ají* es una planta muy conocida e usada en todas las partes destas Indias, (...) e es la pimienta de los indios 「アヒはこの地インディアスのいたるところでみなによく知られ、多用されている植物の一つで、(...)インディオのコショウである」(Oviedo, I, p. 235, b.)

anón, anona: *Anón* es un árbol, el cual e su fructa tienen mucha semejanza con el guanábano 「バンレイシは木の一つで、その木と果実とはグアナバノにととてもよく似ている」 (Id. I, p. 258, a)

baquiano: (...), conforme a los documentos que dan allá los que llaman baquianos o pláticos. 「バキアノつまり水先案内と呼ばれる人達が、かの地で発行する書類に従えば」 (Acosta, p. 65, a)

batata: *Batatas* es un grand mantenimiento para los indios en aquesta isla Española e otras partes, e de los preciosos manjares que ellos tienen, y muy semejantes a los ajos en la vista, y en sabor muy mejores; puesto que, a mi parescer, todo me parece una cosa, o cuasi, en la vista, en el cultivar, y aun mucho en el sabor; 「バタタはここエスパニョラ島やその他の土地のインディオにとっての大切な食物の一つで、彼等がもっている珍重すべき食品の一つであり、見たところアメリカサツマイモに非常によく似ているが、味の点ではそれよりもずっとよい。つまり、私の考えでは、全体とすれば、外見も、栽培法も、そのうえに味の点ではなおのこと、私には同じ一つのものに、あるいはほとんど同じものに思えている」 (Oviedo, I, p. 234, b.)

batea: El oro en polvo se beneficia en lavaderos, (...), hasta que el arena o barro se cae de las bateas o barreñas, 「砂金は洗い場で、(...), 砂や泥がバテアつまり洗い桶から流れ落ちるまで洗って、採取される」 (Acosta, p. 93, a)

bejuco: (...); e una [caña] a par de otra, hacen pared, e atanlas muy bien con bejucos (que son unas venas o correas redondas que se crían revueltas a los árboles, y también colgando de ellos como la correhuela), 「そして彼等は茎を一本づつ隣り合せに並べて壁を作り、その茎をベフコでしっかりとしばる (このベフコとは、木にからまったり、またニワヤナギのようにぶら下がったりして、生育する葉脈あるいは円い紐状の蔓である)」 (Oviedo, I, p. 143, b)

bihao: (...) ciertas hierbas o plantas, nascidas por la diligencia de la Natura, muy semejantes en la hoja a los que acá llaman plátanos (sin lo ser),

「ある種の草本あるいは植物で、大自然の恵みで生まれ、(本当ははそうではないのだが) こちらではバナナと呼ばれる木にその葉が非常によく似ている」(Id., I, p. 236, b)

cabuya: La cabuya es una manera de hierba que quiere parescer en las hojas a los cardos o lirios, pero más anchas e mas gruesas hojas.

「カブヤは草本の一種でその葉はアザミかアヤメに似ているが、それよりももっと幅広で肉の厚い葉をしている」(Id., I, p. 237, b.)

caimito: Caimito es un árbol el más conocido en el mundo para quien una vez le hobiese visto; 「カイミトとは木の一つで、一度でもそれを見たことのある人にとってみれば、この世で最もなじみ深いものである」(Id., I, p. 251, a.)

caney: El buhío o casa de tal manera fecho, llámase caney. Son mejores e más seguras moradas que otras, 「そのようにして建てられたブヒオつまり家は、カネイと呼ばれる。この家は他の家よりも立派でまたしっかりとしている」(Id., I, p. 143, b)

ceiba: En esta isla Española hobo una ceiba, ocho leguas desta cibdad (donde ha quedado el nombre de *Arbol gordo*), 「このエスパニョラ島で、この町から8レグアのところにセイバの木があった(そこでは“巨大木”という名が残った)」(Id., I, p. 290, a)

comején: De los animales insectos que hay en esta isla Española, e primeramente de hormigas y del *comijén*. 「このエスパニョラ島にいる昆虫類について、まず最初に、蟻とコミヘンとについて」(Id. II, p. 76, b.)

cucuy, cucuyo: De las moscas o mariposas e semejantes animales que vue-

lan e relucen de noche; y en especial de uno destos que en esta isla le llaman los indios, *cocuyo*. 「蠅あるいは蝶と夜に飛び光るそれに似た動物について。とくに、この島でインディオがコクヨと呼ぶこれら動物の一つについて」 (Id., II, p. 84, b.)

curí: *Corí* es un animal de cuatro pies, e pequeño, del tamaño de gazapos medianos. Parecen estos corís especie o género de conejos, 「コリは4本足の動物の一つで、小さく、中形の小ウサギほどの大きさをしている。このコリはウサギの種か属のものに思える」 (Id., II, p. 29, b)

guácimo: (7)

guanábana: *Guanábano* es un árbol de gentil parecer, hermoso, grande e alto árbol, e su fructa hermosa e grande, como melones en la grandeza (porque son tamañas las guanánanas), y verdes.

「グアナバナは立派な姿の木で、きれいで、大きくて、背が高く、その果実もきれいで、メロンぐらいの大きさで（その果実グアナバナはそれほどの大きさなのである）、緑色をしている。」 (Oviedo, I, pp. 258-259)

guanín, guaín: este *Guanin* no era isla según yo creo sino oro baxo que según los indios de la Española tenía un olor, 「このグアニンというのは、私のみるところ島ではなく、低位の金のこと、この金は、エスパニョラ島のインディオによれば、匂いを放ち」 (Las Casas, 1989, p. 143)

guayaba: El *guayabo* es un árbol que los indios prescían, y hay mucha cantidad destos árboles en esta e otras islas (...). Llámase esta manzana o poma guayaba, porque el árbol se llama guayabo. 「グアヤボとはインディオが珍重する木の一つで、この島や他の島にはこの木が多数生えている (...). このリンゴあるいはポマの実をグアヤバと呼ぶのは、

その木がグアヤボと呼ばれるからである。」 (Oviedo, I, p. 258, b)

guayacán: Del árbol llamado *guayacán*, (...), el origen donde los cristianos vieron las búas, y experimentaron e vieron curarlas y experimentar el árbol del *guayacán*, fue en esta isla Española. 「グアヤカンと呼ばれる木について。(…)キリスト教徒が横根を目にして、自分でも経験し、その治療を考えて、グアヤカンの効能を試してみた、その最初の場所は、このエスパニョラ島だった。」 (Id., II, p. 9)

hamaca: (...), bien es que se diga quécamas tienen los indios en esta isla Española, a la cual cama llaman hamaca; y es de aquesta manera: 「このエスパニョラ島でインディオがどのような寝台を使っているかを説明しておくのもいいことだろう。それはアマカと呼ばれ、こんな作り方になっている。」 (Id., I, p. 117, a)

hicaco: *Hicaco* es un árbol que en la hoja quiere parescer mucho al madroño, y muy desemejante en la fructa. 「イカコとはその葉はヤマモモにととてもよく似ているが、果実はそれに似ても似つかない、そんな木の一つである。」 (Id., I, p. 255, a)

hobo: *Hobo* es árbol grande y hermoso, fresco e de buen aire, e sombra muy sana. (...). La fructa es buena e de buen sabor e olor, y es como ciruelas pequeñas, y es amarilla. 「オボとは大きくてきれいな木で、涼しくていい風を呼び、とてもすがすがしい木蔭になる。(…)。その果実は美味で、味も匂いもよく、小さなスモモのようで黄色をしている。」 (Id., I, p. 250, a)

huracán: Huracán, en lengua desta isla, quiere decir propriamente tormenta o tempestad muy excesiva; porque, en efecto, no es otra cosa sino grandísimo viento e grandísima y excesiva lluvia, todo junto, o cualquiera cosa destas dos por sí 「ウラカンとはこの島のことばでは、本来は、非常に激しい大嵐か大暴風雨を意味する。つまり、実態は、

大風と大豪雨とを一緒にしたものか、それともこのうちのどちらか一つか、にほかならない。」(Id., I, p. 146, b)

iguana: De la serpiente o animal llamado *i.u.ana*. del cual género había e hay muchas en esta isla. (...). Llámase *iuana*, y escribese con estas cinco letras, y pronúnciase *i*, e con poquísimo intervalo, *u*, e después, las tres letras postreras, *ana*, juntas o dichas presto: así que, en el nombre todo, se hagan dos pausas de la forma que es dicho. 「蛇あるいはイウアナと呼ばれる動物について。この属の動物はこの島に多くいたし今も多くいる。(...)。これはイウアナと呼ばれこの五文字で書かれる。i が発音され、続いてほんの短い間隔をおいてu が発音され、そのあと後ろの三文字 ana が一緒につまり素早くいわれて発音される。従って、この名詞全体としては、いったように二つの休止がおかれるべきである。」(Id., II, p. 32, a)

jején, xixén: (...), mas en el campo en algunas partes hay tantos [mosquitos], que no se pueden comportar; y los peores de todos son unos menudísimos que llaman *xixenes*, que 「しかし、野原ではあちらこちらに沢山の蚊がいて、辛抱しきれないほどである。とくにこのうち質の一番悪いのは、シシェンと呼ばれるとても小さな蚊であり」(Id., II, 81, a)

macana: Juntáronse hasta cuarenta españoles con estas armas y cincuenta indios flecheros con arcos y macanas. 「このような武器をもった40人ものイスパニア人と弓とマカナとをもった50人の原住民弓矢兵とが集合した」(Acosta, p. 274, b) Sus armas era unas *macanas* o espadas de palma y unasa varas largas con sus puntas tostadas. 「彼等の武器はマカナつまりヤシの木の刀とその先端に焼を入れてある長い棒とであった。」(Las Casas, 1994, p. 1935)

magüey: Del *magüey*, que es otra hierba en algo semejante a la cabuya. Puede servir de mantenimiento en tiempo de nescesidad, 「マゲイとい

う、カブヤに少し似ているもう一つの草本について。これは、食べ物不足の時期には食料としても役にたつ。」(Oviedo, I, p. 238, a)

maíz: Del pan de los indios llamado *maíz*, e de cómo se siembra y se coge, y otras cosas a esto concernientes. 「マイスと呼ばれるインディオのパンについて、またどのようにしてその種を播きそれを収穫するかということと、この仕事に関する他のことごとについて。」(Id., I, p. 226, b)

mamey: *Mamey* es uno de los más hermosos árboles que puede haber en el mundo, 「マメイとはこの世にありうる最もきれいな木の一つである」(Id., I, p. 259, b)

manatí: *Manatí* es un pescado de los más notables e no oídos de cuantos yo he leído o visto. (...). Este es un grande pescado de la mar, 「マナティとは最も注意を要する魚の一つで、私がこれまで読んだり見たものの中では、その名を聞いたことのないものである。(...)。これは海に生息する大魚であり」(Id., II, p. 63, b)

mangle: *Mangle* es un árbol de los mejores que en estas partes hay, y es común en estas islas e Tierra Firme, e para varazones de buhíos e estantes o postes para las cacas, 「マングローブとはこの地方にある最も上質の木の一つであり、このあたりの島と大陸部でふつうによくみかけられ、小屋や棚の支え棒や家の柱に使われる。」(Id., I, p. 285, b)

maní: Una fructa tienen los indios en esta isla española, que llaman *maní*, la cual ellos siembran y cogen, e les es muy ordinaria planta en sus huertos y heredades, 「このエスパニョラ島でインディオは、マニと呼ぶなり物を作っている。彼等はその種を蒔き収穫するが、これは彼等にとっては菜園や野菜畑でごく日常的にみられる植物である」(Id., I, p. 235, a)

naguas: (...) las cacicas e mujeres principiáles casadas, traen estas naguas o mantas desde la cinta hasta en tierra, delgadas e muy blancas e gentiles, 「首長夫人や身分の高い既婚女性はこのナグア, つまり薄くて純白で柔らかな覆い布を, 腰から地面に届くところまで巻いている」 (Id., I, p. 146, a)

nigua: Daba en aquella tierra una enfermedad de unos gusanos tan delgados como un cabello, que se metían por la carne sin sentir, que llaman *niguas*, y se van hinchando y engrosando más que un dedo, 「以前にかの地で, 髪の毛のように細い虫が惹き起こす病気が流行ったが, これはニグアと呼ばれる虫が, 気が付かないうちに体内に入り込み, 段々とふくらんで, 指よりも大きく太っていくのが原因である」 (Acosta, p. 314, b)

pitahaya: *Pitahaya* es una fructa tamaña como un puño cerrado, poco más o menos, y esto es su común grandeza. (...). Es sana fructa e a muchos les sabe bien; 「ピタハヤとは, おおまかにいえば, 握り拳ほどの大きさの果実で, これがその一般的な大きさである。(...)。体にいい果実で, 味がよくて多くの人の好みに合う」 (Oviedo, I, p. 263, b)

sabana: Lllaman sabana los indios, (...), las vegas e cerros e costas de riberas, si no tienen árboles, e a todo terreno que está sin ellos, con hierba o sin ella. 「インディオは, 木が生えていない場合に, 沃野や丘や河川敷きを, また草が生えていてもいなくても, 木の植っていない土地すべてを, サバンナと呼んでいる。」 (Id., I, p. 160, a)

tabaco: Usaban los indios desta isla, entre otros muchos vicios, uno muy malo, que es tomar unas ahumadas, que ellos llaman tabaco, para salir de sentido. Y esto hacían con el humo de cierta hierba que, a lo que yo he podido entender, es de calidad de beleño; 「この島のインディオは多くの悪習の中でも, 実に忌むべき悪習に染まっていた。それは, 彼等がタバコと呼ぶいぶし煙を吸って意識を失うことである。これには, 私が理解しえたところでは, ヒヨスのような性質の草の煙を使っ

ていたのであった。」(Id., I, p. 116. a)

tiburón: De los *tiburones* y de su grandeza, e de cómo se toman, e otras particularidades destos animales. 「サメとその大きさについて、またこのサメをどのようにして捕獲するかや、この動物のその他の特徴について」(Id., II, p. 60, b)

tuna: (...), es bien que se diga aquí de otros cardos que llaman *tunas*, e la fructa que echan tiene el mismo nombre. 「ここでテウナと呼ばれる、別種のオニアザミについて触れておくことが適当であるが、これにできる果実は、同じトゥナという名前である。」(Id., I, p. 265, b)

yuca: Tractemos agora de otra manera de pan que los indios hacen de la *yuca* en esta isla Española y en las otras todas que están pobladas de cristianos, (...). La planta que se llama yuca, son unas varas ñudosas, algo más altas que un hombre, 「このエスパニョラ島やそのほかのキリスト教徒が住むすべての島で、インディオがユカから作る別種のパンについてこれから説明することにしよう(...)。ユカと呼ばれる植物は節くれだった茎状のもので、人の背丈よりももう少しだけ背が高い」(Id., I, p. 230, a)

Cuervo はまた、次の語をも、アンティリヤス期に固定した語彙の中に加えている(7)。

caimán: De los lagartos e caimanes que llaman hay mucho escrito en Historias de Indias; y son verdaderamente los que Plinio y los antiguos llaman cocodrilos. 「トカゲやカイマンと呼ばれるものについては、インディアスの実録で多くの記述があるが、これはまさしくプリニウスと古代の人がワニと呼んでいるものである」(Acosta, p. 73, a)

barbacoa: (...) vivían en las barnacoas [*sic*] o casas sobre los árboles que estaban en el agua; 「彼等はバルナコア、つまり水中に生えた木の上

に作った家に住んでいた」(Las Casas, 1994, p. 2019); (Cuervo, 1955, p. 844)

chicha: El vino de maíz, que llaman en el Perú *azúá*, y por vocablo de Indias común *chicha*, se hace en diversos modos. 「トウモロコシの酒は、ペルーではアスアと呼び、インディアス共通の語ではチチャと呼んでいて、色々な方法で作られる」(Acosta, p. 110, a)

guacamaya: Las guacamayas son pájaros mayores que papagayos, y tienen algo de ellos: son preciadas por la diversa color de sus plumas, que las tienen muy galanas. 「グアカマヤとはオウムよりも大きな鳥で、オウムに似たところが少しある。様々な色の羽根をしているので珍重され、とくに、羽根が美事で鮮やかである。」(Id., p. 132, a)

guama: *Guama* es un árbol grande e de la más común e abundante madera que hay en esta isla Española, e de la que más se gasta 「グアマとは大きな木の一つで、このエスパニョラ島で最もよくみかけて、また最も豊富にでる木材で、しかもまた最も多く消費されるものである」(Oviedo I, p. 254, b)

これらの語に加えて、Cuervo は、ナワトル語源の tamal, huacal, achioté, aguacate, cacao, chocolate, jicara, petaca, tiza, tomate, zapote も、この新大陸発見の初期に形成された語彙の一部をなすものと考えている。このうち、cacao, chocolate についてのみみれば (8)、次のような記述がある。

cacao : El cacao es una fruta menor que almendras, y más gruesa, la cual tostada no tiene mal sabor. Esta es tan preciada entre los indios, y aun entre los españoles, que es uno de los ricos y gruesos tratos de la Nueva España, porque (...). El principal beneficio de este cacao es un brebaje que hacen, que llaman *chocolate*, que es cosa loca lo que en aquella tierra le precian, 「カカオとはアーモンドよりも小さいがもっと肉厚の果実のことで、これを煎ると捨てがたい味になる。インディ

オの間でまたイスパニア人の間でさえ珍重されているので、ヌエバ・エスパニャの高価で重要な交易品の一つにもなっている。(…)。このカカオの一番の利用法はそれで作る飲み物で、チョコレートと呼ばれていて、かの地で人がそれを珍重する様は間違いじみている」(Acosta, p.116)(9)。

5. これまで特定のクロニスタの記述だけをみたが、新大陸発見後一世紀ほどの間にこの分野で作成された記録や史家の著述の中にも、いうまでもなく、これに類する記録を多数、見出すことができる。これに対して、その対象とする分野に違いはあるとはいえ、すでに上述したように、Covarrubias が *Tesoro* に収録した *indoamericanismo* の数は驚くほど少ないのである(10)。

5.1 以下に、その 23 語を挙げ、あわせて各項目について、*Tesoro* の解説の全部あるいは一部を取り出し、それについて簡単な考察を加えることにする。

acal: 見出語としてはなく, canoa の項に atcales というメキシコ語での (en lengua mexicana) の語源の形が示され, varquillas (=barquillas 「小船」) の意味が与えられている。

Araucana: Provincia de la India Occidental, vale tanto como ardiente, seca, calurosa, del verbo hebreo *arau*, *vel harau*, *arescere*, *siccari*, *confici*. 「西インディアの一地方のことで、この語は、“燃えた、乾いた、暑い”の意味をもつが、これは、“乾く、乾燥させる、暑い”の意味のヘブライ語動詞 *arau* あるいは *harau* に由来する。」これに続いて、Alonso de Arcila の叙事詩についての言及がある。

cacique: Vale tanto, en lengua mexicana, como señor de vassallos, y entre los bárbaros aquél es señor que tiene más fuerças para sujetar a los demás. 「メキシコ語で“家来の主人”の意味をもつが、未開人の間では他人を従えるためのより大きな力をもっている人が“主人”なので

ある。」続いて、バベルの塔やバビロニア、ヘブライ人についての言及があり、この語 *cazique* は、ヘブライ語の動詞 *chazach* 「強化する」から派生した形 *chezech* 「力」を語源として、そこから *cazique* が生じたという可能性もある、といている。しかし、終りには、*con todo esso yo me remito a los que tienen noticia de la lengua* 「とはいっても、私はそのことばの知識のある人に、ことの解決を任せておく。」といている。なお、二種類の表記 *cacique*, *cazique* が使われている。

caymán: Un pez lagarto que se cría en las rías de Indias, y se come los hombres que van nadando por el agua, y por ser el nombre de aquella lengua bárbara, no me han sabido dar su etimología; deve ser a modo de los cocodrilos que se crían en el río Nilo. 「インディアスの入江に生息し、水中を泳いでいく人間を喰うトカゲ魚。かの地の未開語の名前なので、これまで私にはその語源が明らかにはしてもらえなかった。これはナイル川に生息するワニのようなものにちがいない。」

canoa: Es varco hecho ordinariamente de una pieça como artesa, de que usan los indios, y ellos llaman a estas varquillas en su lengua *atlcales*, que vale como casas de agua, 「通常は、パンのこね箱のように、まるまる一本の木で出来た船で、これをインディオが使っていて、この小舟を彼等のことばで *atlcales* と呼ぶが、これは“水上屋”の意味をもつ。」続いて、しかしながらこの呼び方はメキシコ語によるもので、最初にイスパニア人が拠点としたサント・ドミンゴ島では、この種の小舟を *canoa* と呼んでいるので、こちらの名称が一般化することになった、と説明している。なお、*canoa* の語源となる具体的な語形は挙げられていない。

coca: Cierta droga, que se llama coca o coco de Levante, con que suelen los pescadores emborrachar el pescado y hazer que ande adormecido sobre el agua. 「薬剤の一種で、コカあるいはココ・デ・レバンテとか呼ばれ、これを使っていつも漁師が魚を痺れさせ、ねむらせて水上

に浮かび上がらせている。」これ以上の記述はないので、著者がこの語を新大陸語源の語とみていたのかどうかは分からない。

Cuzco: Provincia de las Indias Occidentales 「西インディアスの一地方」とあるだけ。

hamaca: Cama de indios, y es una gran manta de algodón o de tela de ervage 「インディオの寝床で、木綿か草の布かで作った大きな掛け布」として、その詳細が説明されていく。最終的に語源を挙げて、Puede ser el nombre hebreo, del verbo *hhamak, vertere, convertere*, etc., porque se buelven y revuelven en ella 「この語はヘブライ語の動詞 *hhamak-vertere* “回転する・裏がえす”, *convertere* “向きを変える” の意味から出た名詞かもしれない。というのは、人は寝床では体を回転させたり寝返りを打ったりするからである」といっているが、この語源はあまりにも出来すぎている。これ以上の記述はない。なお、このヘブライ語語源説は、かつて聖・イシドルスが、ラテン語「猫」の語源の仮説の一つとして挙げた、“*cattus* というのは *cattat* (= *videt* 「見る」) だからである”，といった場合に、非常によく似ていると思われる (*Etymologiarum*, XII, 2, 38)(11)。

huracán: Un viento que va haziendo un remolino, con el qual trayendo los navíos a la redonda los hunde, que parece horadar con ellos el agua; y así se dixo *quasi* horacán. 「竜巻を起こしていく風のことで、この竜巻でもって風が船をぐるぐると巻き込んで沈没させる、その様は、さながら船でもって水面に穴を穿つばかりである。ここから、かつては *horacán* “穴穿ち” のような言い方ををした」といっている。ここでは、動詞の *horadar* から *horacán* を導き、これと *huracán* を関係付けようとしたのであろうが、これは無理だろう。なお、新大陸語源の語としての記述はない。

(この語については、もう一つ、*uracán* の見出しのもとで以下のような記述がある)

uracán: Un cierto viento que en la carrera de las Indias suele echar a fondo los navíos, trayéndolos a la redonda y uracando el mar para que se los trague. Uraco, es término sayagués, y vale agujero, y de allí uracar; agujerar podría ser griego ouros, *latine impetus*. 「インディアスへの航路において、よく船を沈めてしまうような大風のことで、この風は船をぐるぐると巻き込んで海を穿って、船を呑み込ませてしまうほどに荒れる。uracoとは、サヤゴの田舎ことばで、“穴”の意味をもち、そこから uracar “穴をあける”という語が出ている。agujerar “穴をあける”は、ギリシャ語の ouros “追い風”，ラテン語の impetus “狂暴”に当たるのかもしれない。」

こちらでは、この語がインディアスとなんらかの関係をもつことを暗示してはいるが、語源としては、やはり、ギリシャ語、ラテン語の可能性を捨てきれないでいるように見える。

Ingas: Deste nombre se llamaron los reyes del Perú de uno dellos el más antiguo, como se lee en las corónicas de las Indias. 「この名前でペルー歴代の王が呼ばれたが、とくにそのうち最古の一人の王の名前で、これはインディアスのクロニカで読めるところである。」これ以上の記述はない。

maíz: Una suerte de panizo que haze unas mazorcas, y en ellas unos granos amarillos o roxos, tamaños como garvanços, de los quales molidos haze pan la ínfima gente. Plinio le llama *milium indicum*. Verás a Dioscórides, lib. 2, *capite* 88. 「穂軸を結ぶ稗の一種で、その穂になる穀粒は黄色か赤色、ガルバンソほどの大きさで、これを挽いて下層民はパンを作る。プリニウスはこれを“インドの黍”と呼んでいる。ディオスコリデス、第2巻、88章を参照せよ。」これ以上の記述はなく、新大陸語源の語の表示もない。この説明に基づいていえば、ここでの「下層民」(ínfima gente)とは、イスパニアについてのことになるのであろう。

mechoacán: Una raíz medicinal, que en nuestros tiempos se ha traydo de

las Indias; dicha assí de la provincia de donde se trae, la qual se llama la provincia de Mechoacán, 「薬種根の一つで、今の時代にインディアスから伝えられたものである。この名称は、これがもたらされるその地にちなんだもので、そこは“メチョアカンの地”とよばれているのである」。以下に、メチョアカンの語義, lugar de pescado 「魚のいる場所」の説明があり、終りに、この薬とその使用法については、Monardes を参照するといいとある。なお、Nicolás Monardes (1512-1588) は、セビリャ出身の医師で、新大陸原産の薬草研究で名高い。

mexicano: 見出し語にはなし。canoa の説明文中にみられる。

México: Ciudad populosísima en la Nueva España, y real, fundada sobre una laguna. 「ヌエバ・エスパニヤの人口稠密な都市で、国王直轄、湖上に建設された都市」とある。以下に、本来の名称は Tenuch titlam であり、この都市の建設とサボテン類 (nopal, tuna) との関わりなどが、説明されている。

mico: Es una especie de mona, pero con cola y de facciones y talle más jarifo; 「猿の一種で、尻尾があり猿よりもなお可愛い表情と姿をしている。」続いて、この尾長猿 (mico) と猿 (mono) との違いに言及して、語源をも探っているが、新大陸語語源の明示はない。しかし最後には、これは原産地で用いられている名称といている。

Motezuma: Nombre de aquel potentísimo rey indio; vale tanto como hombre sañudo y grave. 「かの大権力をもったインディアスの王の名前。その名は“憤怒の威厳ある人”を意味する。」続いて、インディオはこの王を Motezumacin と呼んでいたが、とくにこの折尾辞 cin はイスパニア語の敬称辞 don に当たる、といった説明も付加されている。

nopal: 見出し語にはなし。México の説明文中にみられる。

Perú: Provincia famosísima en la India Occidental, conquistada y

señoreada de los Católicos Reyes de España, de donde se han traído tantos millones de oro y plata. 「西インディアにある有名このうえもない一地方で、イスパニアのカトリック両王によって征服され領有された地。その地からは、幾百万の金銀が持ち来たられた。」続いて、この語の語源に言及して、四つの説を紹介している。最初は、そこにある川の名 Perú にちなんでその地をも Perú といったとする説、第二は、イスパニア人征服者がその地で最初に出会ったインディオが発したことば、Berú Pelú に由来するとする説、第三は、ヘブライ語の動詞 *parad-partiri* 「切り分ける」、*dividere* 「分割する」、*separare* 「分け隔てる」の意味から派生した名詞で、ほぼ *pere* となる形に由来するとする説、第四は、聖書の地名オフィルに関係付ける説である。とくにこの第四説については、多くの聖書の記述をも挙げている。

Perulero: El que ha venido rico de las Indias, del Perú 「インディアスから、ペルーから金持ちになって帰って来た人。」これ以上の記述はない。

pita: Yerba de Indias, de la qual hazen un hilo muy delicado para guarniciones, como acá se saca el hilo del cáñamo y del lino. 「インディアスの草で、これから縁飾り用の非常に細い糸が作られる。この地で麻や亜麻から糸が作り出されるように。」これ以上の記述はない。

Tenochtitlán: 見出し語にはなし。México の説明文中にみられる。

tiburón: Un pescado grande que sigue las naves que van a Indias, y es muy tragón y engulle quanto cae dellas en la mar. 「インディアスに向かう船の後を追っていく大きな魚のことで、非常に大きな口をしていて、船から落ちるものすべてを呑み込んでしまう。」これに続いて、時のクロニスタ、Gómara を引用している。なお、この記述だけでは、この語が新大陸に由来するものであるとは、断定し難いであろう。

tuna: Es una especie de higuera de las Indias, la qual en lugar de ramos

produce a manera de palas unas hojas muy anchas y gruesas, engeridas unas sobre otras, y por sus extremos armadas de agudas espinas; 「インディアスのイチジクの種類で、この木は枝の代わりにしゃもじのようなとても幅広くまた肉の厚い葉を付け、この葉が上下に重なって出て、その葉の先端には鋭いとげを付けている。」ここでも、ディオスコリデスへの言及がある。

5.2. ここに挙げた *Tesoro* の記述から多くの事柄が観察されるが、とくに以下のいくつかの点を挙げておきたい。

1) まずは語源の問題がある。Covarrubias は各語の語源を求めようとしているが、すべての語について、くまなく、その語源を挙げているわけではない。また、語源とはいっても、各語についてそれぞれ語源となりうる語形とその音声変化の過程を説明するのではなく、各語の出所、由来を示すことで止める場合が多い。

これは、*Tesoro* の事典的性格にも大きく関係するところで、厳密な語形を求め、その語源としての資格を論ずるよりも、各語の出所、起源を明らかにするところに、記述の主眼を置いたため、と思われる。従って、その語源にいくつかの仮説がある場合、可能と思われる事項を幅広く取り上げ、これを収録していったのであろう。

a) Covarrubias は収録した indoamericanismos 23 語のうち 19 語を新大陸に由来するものとしている。これは、acal, Araucana, cacique, caymán, canoa, Cuzco, hamaca, ingas, mechoacán, mexicano, México, Motezuma, nopal, Perú, perulero, pita, Tenochtitlan, tiburón, tuna である。しかし、これらの語については、新大陸との関連を示したうえで、その一部では、ヘブライ語の語源の可能性にも言及している。これは、Araucana, cacique, hamaca, Perú に関してである。それに加えて、ヘブライ語語源以外に、しばしば、プリニウスを初め、その他、多くの古典・古代の学者、思想家、聖書の記述にまでも遡って、多面的に語の起源を求めようとする。こうした姿勢は、たとえ新世界と向き合っても、自分たちの価値観を信じて疑わなかった、当時のヨーロッパ教養人の伝統的な世界観の現われ、と理解す

べきなのであろうか。

b) coca, maíz の新大陸との関係付けはなく、語源となる語形の表示もない。そのうえ、maíz については、プリニウスやディオスコリデスへの言及しかないところは、上記の19語についての正確な位置付けとは好対照をみせている。

huracán にはないが、もう一つの見出語としてある uracán では、その出所には、新大陸との関係が指摘されている。一方、mico の語源、出所についての記述は曖昧である。

2) これらの語源の提示や語形の解説を行なうに際して、Covarrubias は当時刊行されてあったクロニカを中心とする新大陸史誌を綿密に読み、分析している様が窺える。これはいくつかの項目、たとえば、tiburónの項でもみられるように、Covarrubias 自身が依拠した文献を、明示していることから明らかになる。この点をより具体的にみれば、acal についての *Tesoro* の記述は、Gómara, (1979, II) のものと、次のように重なりあっている。

Andan en estas lagunas doscientas mil barquillas, que los naturales llaman *acalles*, que quiere decir casas de agua: *atl* es agua, y *calli* casa, de que está el vocablo compuesto. Los españoles las dicen canoas, avezados a la lengua de Cuba y Santo Domingo. Son a manera de artesa, y de una pieza hechas, grandes o chicas, según el tronco del árbol. Antes me acorto que alargo en el número de estas *acalles* para según lo que otros dicen, que en sólo México hay ordinariamente cincuenta mil de ellas para acarrear bastimentos y portear gente; (p. 126)

3) Covarrubias がその典拠とした文献をもとに Perú をみると、この語の語源については、四つの可能性が挙げられている。その地を流れる川の名のPerú説、Berú Pelú 説、ヘブライ語説、聖書の列王記にあるオフイル 説である。しかし、Covarrubias が Berú Pelú 説の典拠として挙げている Josefo de Acosta, *De Natura Novi Orbis (Historia natural y*

moral de las Indias, 1590に先んじて出版された『新世界論』)をみても、そこには、*Tesoro* の記述とは違って Berú Pelú については何の言及もない(12)。また、オフィル説を紹介してはいるが、これをいくつかの角度から検討した結果、この説を完全に否定していることが分かる。従って、あとは Perúの語源説明の可能性としては、ヘブライ語説しか残らない、ということになる。そうすると、この項目で、Covarrubias があえて最初の二説をもその語源の説明のなかに組み込んで、あたかも、Acosta をその二説の提唱者のようにいうことには、大きな疑問が生じてくるのである。これについては J. M. Lope Blanch は、まずは、Berú Pelú 説を Acosta の記録とするのは Covarrubias の単なる思い違いで、その出典は同時代の文献学者 Bernardo José de Aldrete, *Del origen y principio de la lengua castellana* (1606) に求むべきもの、としている。そして、Acosta については、彼が事実書いている、*Acá es opinión que de un río en que a los principios dieron los españoles, llamado por los naturales Pirú, intitularon toda esta tierra Pirú* 「当地で考えられているのは、最初にイスパニア人が出くわした川で、その地の人々から呼ばれている名前の Pirúからとって、その土地全域を Pirúと称するようになった、ということである」(Acosta, p. 22, b), という部分だけを取り上げておけばいい、といっている(13)。

6. これまでにみた Covarrubias の indoamericanismo の処理の方法について、今度は少しばかり角度を変えて、考察をしてみよう。

6.1. Covarrubias が *Tesoro* を執筆していた時代は、イスパニア語について多面的な学術研究が始まった時でもあった。この種の研究のうち、かの Juan de Valdés は、イスパニア語への新語の導入についての議論のなかで (*Diálogo de la lengua*, 1535), 翻訳とのかかわりで次のようにいっている。これをみるかぎり、Valdés の意識にはいまだ新大陸への関心はなかったといえよう。

Assí avría más personas que supiesen las lenguas necesarias, como

son la latina, la griega y la hebrea, en las quales stá escrito todo quanto bueno ay que pertenezca assí a religión como sciencia. 「ですから、本当はラテン語、ギリシヤ語とヘブライ語のような、必要なことばを知っている人が、もっといてもいいということでしょうね。というのも、宗教や学術に関することによって為になることはすべて、これらのことばで書かれているからなのです。」 (*Diálogo de la lengua*, Clásicos Castellanos, no. 86, 1965, p. 145) (14)

6.2. 従って、インディアスに代表される新しい世界をもその考察の対象とし、そこに新しい概念を導入しようとするときにも、できうるかぎり、伝統的な基準を当てはめ分節し、整理するという手法が採られたと思われる。これが、すでに Covarrubias にもみえた、ディオスコリデス、プリニウス、等、等、であり、ヘブライ語、ギリシヤ語、ラテン語、またときには、アラビア語、なのであった(15)。これに外れる場合はどうなるのか、そこには旧来からの “bárbaro” なる発想がその力を発揮することになった、と考えてみたい。たとえば、Oviedo は *Historia general y natural de las Indias* の第一巻の序文の中、時のイスパニア国王カルロス一世にあてた献辞で、次のようにいっている。

Si algunos vocablos extraños e bárbaros aquí se hallaren, la causa es la novedad de que se tracta; y no se pongan a la cuenta de mi romance, que en Madrid nascí, y en la casa real me crié, y con gente noble he conversado, e algo he leído, para que se sospeche que habré entendido mi lengua castellana, la cual, de las vulgares, se tiene por la mejor de todas; y lo que hobiere en este volumen que con ella no consueene, serán nombres o palabras por mi voluntad puestas, para dar a entender las cosas que por ellas quieren los indios significar. 「本書の中に、耳慣れない粗野な言葉がいくつか見つかるのであれば、それは、扱われている事柄が目新しいからで、わたしのロマンス語[カステイーリャ語のこと]の責任にしないで下さい。わたしはマドリードに生まれ、王家で育ち、これまでやんごとなき方々と言葉を交わし、ものの本をいくつか読みました。こう申しますのも、私がカステイーリャ語に通じていることを理解していただきたいからで

す。カスティーリャ語は俗語の中で最も素晴らしい言葉であると考えられています。もしも本書にカスティーリャ語に馴染まない言葉があるとすれば、それは、インディオたちが言おうとしている事柄を分かってもらうために、わたしがすすんで記載した彼らの用いる名前か言葉です。」(Oviedo, I, p. 10, b; 訳文は、オビエード；染田・篠原訳『カリブ海植民者の眼差し』1994, p. 14 より)

6.3. 同じ線上にあると考えていいのが、Acosta の文字の使用をめぐるの発言である。彼によれば、歴史や古のことごとを人々の記憶に留めるのには三つの方法がある。その一つは文字と書法によってであり、これはラテン人、ギリシア人、ヘブライ人やその他の多くの民族が行なっていることである。二つめは絵図による場合で、これは第二ニカイア公会議においても認められている (*la pintura es libro para los idiotas que no saben leer* 「絵図は字を読めない愚か者にとっての書物である」), という。三つめは、数字や漢字による場合で、たとえば、「百」「千」という数を意味するアラビア数字がこれに当たるが、しかしこの数字は通常の語として「百」「千」を意味するものではない、といっている。ここでは言語音を表わす記号としての文字、その記号の有意的な配列によって、語ということばの単位を作り出すという、言語における文字記号の本質にかかわる問題を扱っているが、本稿のテーマに関係するのは、これに続く次の一節である。

(...): que ninguna nación de indios, que se ha descubierto en nuestros tiempos, usa de letras, ni escritura, sino de las otras dos maneras, que son imágenes o figuras; y entiendo esto, no sólo de los indios del Perú y de los de Nueva España, sino, en parte también, de los japoneses y chinos. 「どのインディオの民族も、現在これまで発見されたものは、文字も書法も使わないで、その他の二つの方法を、つまり画像や模様を使っている。私はこの状況が、ペルーやヌエバ・エスピニャのインディオだけではなく、部分的には日本人やシナ人にも当てはまると思っている。」(Acosta, I, p. 185, b)

Gómara も、*De las letras de México* 「メキシコの文字について」と題し

て、次のように書いている。

No se han hallado letras hasta hoy en las Indias, que no es pequeña consideración; solamente hay en la Nueva-España unas ciertas figuras que sirven por letras, con las cuales notan y entienden toda cualquier cosa, y conservan la memoria y antigüedades. Semejan mucho a los geroglíficos de Egipto, mas no encubren tanto el sentido, a lo que oigo; aunque ni debe ni puede ser menos. 「今日までインディアスでは文字が見つけ出されていないが、これは些細な事柄ではない。ヌエバ・エスパニャには文字の代わりの役割をするいくつかの模様があるだけで、これによって人々は、どんなことであれすべてを書き留めまた了解し、記憶すべきことや古のことごとを保存記録するのである。この文字はエジプトの象形文字によく似ているが、私が聞いたところでは、意味全部を書き出せるということではない。もっとも、その働きが不十分ということはあるうべくもないようだが。」 (Gómara, 1979, II. p. 312)

これらのクロニスタの観察、記述をみるかぎり、純粋な表音文字からなるイスパニア語の文字体系の優越性が、強調されていることが分かる。Covarrubias もまた *Tesoro* の *Bárbaro* の項で、「我々は文字をもたない無知の徒を (a los que son inorantes sin letras) “bárbaros” と呼ぶ」と定義して、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語などに代表される「文字」をもつことが、言語の基本的な資格であると考えていたのである(16)。

これに類似した記述は、新大陸発見後一世紀ほどの間に刊行された記録の中に数多く見出すことができる。これは、クロニスタやその他の新大陸と深く関わりあった人達が、原住民語を通じていかにインディアスをみたかを示すものでもあり、また、多くの人々のヨーロッパ中心の価値観を増幅させることにつながった、と思われる。17世紀に入っても、新大陸は、「異様で粗野なことばや習慣をもった土地」という位置付けを、まぬがれえなかったのであろう。Covarrubias も、*cacique* の項では *los bárbaros* を使い、*caymán* の項では *aquella lengua bárbara* を用いるなど、不明確な実体を分類するための基準として、しばしば “bárbaro” なる概念を利用してい

る。Covarrubias から一世紀後、文献学者 Gregorio Mayáns y Siscar (1699-1781) はその著書 *Orígenes de la lengua española* (1737) で, indoamericanismo の代表的なものとして, algodón, bejuco, curamaguei, escuerzonera, guayacán, ihana, leucoma, manatí, pinipinichi, quina, sassafrás, tabaco, vicuña (17); cacao, chocolate, gícara, patata (18) を挙げているが, そのうち algodón, escuerzonera, leucoma, sassafrás の四語は, 新大陸語源ではないと考えられる。これをみても, 新大陸の原住民語系の語彙への認識の不正確さが窺えるであろう (19)。

7. ここまで, indoamericanismo の17世紀イスパニア語への受容の状況を調べてみた。その材料としたのは, イスパニア語通時論において高い評価を与えられているイスパニア語辞典, Sebastián de Covarrubias 著, *Tesoro de la lengua castellana o española* であったが, ここには, A の部だけでも見出し語が1468 項目あるにもかかわらず, 全体を通じて indoamericanismo は 23 語しか収録されてはいない。この数は, 新大陸発見以降それまでに経過した時間の大きさ, イスパニアと新世界とのかかわり, 新大陸の多面的な情報を伝えた数多くの記録の存在, などなどを思うと, 理解しえないような少なさである。この理由を, J. M. Lope Blanch は, 著者が, 時のイベリア半島にすでにしっかりと根付き広く使われていた語にしほり, しかも, 著者が順序立てた選択の作業を行なったとはいえないが, 手元にある記録や文献で, 一応は, アメリカ原住民語系の語と確認できる場合に限ったがためである, と説明している (20)。

他方, 視点を変えれば, Oviedo が, エスパニョラ島の y と呼ばれる植物が鈴のような形の花をつけると説明し, あわせて, これを bejuco 「蔓」の花の形と同じ姿をしているという場合や (Oviedo, II, p. 18, b), またあまり馴染みのない原住民語の語 calachuni を (que quiere decir rey o cacique) 「カラチュニ (この語は王または首長を意味する)」と説明する場合 (Id., II, p. 121, b), など見出される。これは, すでに一部の indoamericanismo が新しい語の説明に活用されている場合で, この事実, これらの語がイスパニア語の語彙体系の中に加わり, イスパニア語として正式の資格を与えられたことの証左, ともなるであろう。

また, cacique, cacica のような有生の実体の場合だけでなしに,

guanábano, guayabo; guanábana, guayaba (果樹/ 果実の意味の区別) にみられるように、イスパニア語固有の形態・意味論的対立の手続きが、アメリカ原住民語系の語に適用されること、一部の indoamericanismo が基体形となって、イスパニア語の派生の手続きが適用されて、cacicado (Oviedo, I, p. 121, a), canoíta (Las Casas, 1951, I, p. 211), maizal (Oviedo, I, p. 230, a), perulero (Cervantes, *Novelas ejemplares*, Clásicos Castalia, III, No. 122, p. 340) などの派生語が、次々と生み出されていることも、新大陸の原住民語からイスパニア語への貢献を示す事実、といえるであろう。しかしながら、この後一世紀を経て、王立イスパニア言語アカデミアが *Diccionario de Autoridades* (1726-39) を刊行するが、そこに収録された indoamericanismo は、いまだ150語を数えるばかり、といわれている。

Covarrubiasの*Tesoro*を通してみるかぎり、なぜそこには23語の indoamericanismoしか取り上げられなかったのか、という疑問は解決しない。時間の経過よりも新旧二大陸を隔てる距離のほうがはるかに大きかったのか、あるいは17世紀初頭のイスパニアにとっては、新大陸は依然として“bárbaro”な存在でしかなかったのか、そこに提起されている問題ははなはだ奥深いと思われる。

注 記

- 1) Lope Blanch, (1990), p. 153. 以下、この語数をもとに本稿を進めることにする。
- 2) Las Casas (1989) では, aje (p. 77), bohío (p. 127), cacique (112), canoa (p.76), cazabí (p. 127), guanín (p. 143), hamaca (p. 76), nitayno (p. 123), noçay (p. 143), tiburón (p.151), tuob (p. 143) に, aji は Las Casas (1995), p. 583 に, それぞれ具体的な記述がある。なお, 表記が一定しないものもある。
- 3) Buesa Oliver y Enguita Utrilla (1992), pp. 29-31; Lapesa (1995), pp. 558-559.
- 4) Lapesa (1995), pp. 412-413.
- 5) Buesa Oliver y Enguita Utrilla (1992), pp. 46-49; Martinell Gifre (1992), p. 78.
- 6) Cuervo (1955), pp. 841-845.
- 7) Cuervo (1955), pp. 844-845.
- 8) Cuervo (1955), p. 845.
- 9) とくに, chocolate については, Lope Blanch (1990), pp. 162-164を参照のこと。
- 10) Indoamericanismoと*Tesoro*との関連については, Los indoamericanismos en el *Tesoro* de Covarrubias (Lope Blanch, 1990, pp. 152-174), Las fuentes americanas del *Tesoro* de Covarrubias (Lope Blanch, 1990, pp. 201-212) が詳しく扱っている。とくに論文前者で Lope Blanch が, 17世紀初頭のイベリア半島のイスパニア語において, 事実上, どれだけの indoamericanismoが, 日常語の語彙としての資格を与えられ使用されていたか,

という問いかけをしている。これについて、彼は、Covarrubias の *Tesoro* と Samuel Gili Gaya の編纂になる *Tesoro Lexicográfico* とを比較して、前者には記録されずしかも後者にみられるものとして、12語 (arcabuco, axí, batata, bexuco, bohío, cacao, caimito, caoba, caribe, cazabe, cocuyo, chile) を挙げている。しかし彼は、このうちで実際に日常的に使用された語は、batataとcacaoであった、と結論しているのである (p. 163)。この説に従えば、17世紀初頭にイベリア半島のイスパニア語で日常的に用いられていた新大陸原住民語系の語は、やはり僅少ということになる。

- 11) El que quisiere dar Etimologías, lo primero que ha de procurar, es no dejarse engañar del sonido de las palabras. 「語源を探ろうとする者がまず心掛けるべき大切なことは、語の音に幻惑されぬことである。」 (Mayáns y Siscar, 1981, I, p. 121)
- 12) Acosta (1959), p. 22 を参照のこと。

なお、今ここで問題となる *Tesoro* の記述は、'Perú'の項にある次のような一節である。
 (...): que llegando españoles a aquella provincia toparon a un indio y, preguntándole qué tierra era aquella, respondió Berú Pelú, que ni él supo lo que le preguntaron, ni ellos entendieron lo que les respondió. Pero de aquí conjeturaron que se llamava Perú, y assí le pusieron este nombre. 「イスパニア人達はその地方に到着したとき一人のインディオと出くわして、彼等がそのインディオにここは何という土地かと尋ねたところ、彼はBerú Pelúと答えた。しかし彼は何を尋ねられているのか分からず、またイスパニア人も何と返事をされたのかが分からなかった。しかしこのやりとりから、イスパニア人はそこがPerúというのだと推測して、そのような名前をそこに付けたのであった。」 (*Tesoro*, pp. 866-867)

- 13) Lope Blanch (1990), p. 172; Aldrete (1993), p. 356.

Aldrete (1993, p. 356) では、Perú の名前の由来について、次のようにいっている。
 El Nombre del Perú no fue antiguo, sino puesto mui a caso. Quando los Españoles llegaron aquellas partes, a vn indio, que cogieron, preguntaron, qué tierra era aquella, el sin entender lo que le dezian, respondió, Beru Pelu, delo qual ellos coligieron, que era el nombre de la tierra, con que le dixeron Perú, la qual no tuuo tal nombre, ni otro general, que la significasse. これは上記の注 (12) に挙げた Covarrubias の記述と、類似するところが大きい。Aldreteも彼が依拠、活用した文献の一つであったと思われる。なおAldreteによれば、Perúという名称が与えられた土地は、イスパニア人がそこに行くまでは、そのような名前も付いていなかったし、またほかに広くその地方一帯を言い表わすような名前もなかった、ということである。

- 14) Juan de Valdés も、勿論のこと、必要不可欠と見なされる語は、ラテン語なりイタリア語から、新造語として導入されるべきである、と考えている。なお、歴史的にはイスパニアは、外国語からの語彙の導入の面で、すでに豊富な実績をもっている。これは、聖・イシドルスの『語源論』、トレド翻訳学派、アルフォンソ十世を中心とする翻訳・出版活動、などで具体化されてきている。
- 15) 新大陸原住民とイスパニア人との間の意思疎通の問題で、通訳の役割が大きなテーマにもなっている。この問題については、Martinell Gifre, (1992), capítulo V (pp. 151-181) が詳しい。なお、コロンブスも、その乗員の一人として、ヘブライ語、カルデア語とアラビア語のできる、ユダヤ系イスパニア人、Luis de Torres を帯同している

(『コロンブス航海誌』1992, p. 77)。

- 16) “Bárbaro” という位置付けによって、「異質なものを、不可解なもの」すべてを処理してしまうという手法は、いうまでもなく、時のイスパニア人による、新大陸の原住民語の評価にもしばしば適用されている（たとえば、Buesa Oliver y Enguita Utrilla, 1992, pp. 30-33）。しかしながら、この概念を学術的に規定したのは、なんといっても、Las Casas であって、これは具体的には、Las Casas (1992), pp. 1557-1592; ラス・カサス; 染田訳 (1995), pp. 307-324 で確認することができる。
- 17) Mayáns y Siscar, G. (1981), I, p. 97.
- 18) Mayáns y Siscar, G. (1981), I, p. 99.
- 19) Mayáns がその語源の決定を誤った algodón, escuerzonero, leucoma, saxifragua について、Covarrubias は、すでに一世紀以上も前に、正しい語源を示している (Lope Blanch, 1990, p. 156)。
- 20) Lope Blanch, (1990), p. 173.

参考文献

- Acosta, José de (1954), *Historia natural y moral de las Indias*, Biblioteca de Autores Españoles, tomo 73, Atlas, Madrid, 1954.
- Aldrete, Bernardo (1993), *Del origen y principio de la lengua castellana*, Ed. Lidio Nieto Jiménez, Visor Libros, Madrid, 1993.
- Buesa Oliver, T., y Enguita Utrilla, J.M. (1992), *Léxico del español de América: su elemento patrimonial e indígena*, MAPFRE, 1992.
- Covarrubias, Sebastián de (1943), *Tesoro de la lengua castellana o española*, Edición preparada por Martín de Riquer, S. A. Horta, I. E., Barcelona, 1943.
- Cuervo, R. J. (1955), *Apuntaciones críticas sobre el lenguaje bogotano*, novena edición corregida, Instituto Caro y Cuervo, Bogotá 1955.
- Dunn, O., and Kelly, J. E. , Jr. (1988), *The Diario of Christopher Columbus's First Voyage to America 1492-1493*, Univerity of Oklahoma, Norman and London, 1988.
- Gómara, F. López de (1979, I), *Historia general de las Indias y vida de Hernán Cortés*, Biblioteca Ayacucho, 64, Caracas.
- (1979, II), *Historia de la conquista de México*, Biblioteca Ayacucho, 65, Caracas.
- Lapesa, Rafael (1995), *Historia de la lengua española*, novena edición corregida y aumentada, Gredos, Madrid, 1995.
- Las Casas, Fray Bartolomé de (1951), *Historia de las Indias*, I-III, 3 tomos, Fondo de Cultura Económica, México, 1951.
- Las Casas, Fray Bartolomé de (1989), *Obras completas*, 14. *Diario del primer y tercer viaje de Cristóbal Colón*, Alianza Editorial, Madrid, 1989.
- (1992), *Obras completas*, 8. *Apologética historia sumaria* III, Alianza Editorial, Madrid, 1992,
- (1994), *Obras Completas*, 3-5. *Historia de las Indias*, I, II, III., Alianza Editorial, Madrid, 1994.
- Lope Blanch, Juan M. (1990), *Estudios de historia lingüística hispánica* (pp. 153-174; pp. 201-

212), Arco/Libros, Madrid, 1990.

Martinell Gifre, E. (1988), *Aspectos lingüísticos del descubrimiento y de la conquista*, CSIC, Madrid, 1988.

—— (1992), *La comunicación entre españoles e indios: palabras y gestos*, MAPFRE, Madrid, 1992.

Mayáns y Siscar, G. (1981), *Orígenes de la lengua española*, tomos I y II, Atlas, Madrid, 1981.

Oviedo, Gonzalo Fernández de (1959), *Historia general y natural de las Indias*, Biblioteca de Autores Españoles, I-V, tomos 117-121, Atlas, Madrid, 1959.

Real Academia Española, *Diccionario de Autoridades*, I, II, III, Gredos, Madrid, 1963.

オビエード『カリブ海植民者の眼差し』(1994); 染田秀藤・篠原愛人訳 岩波書店.

ラス・カサス『インディオは人間か』(1995); 染田秀藤訳 岩波書店.

『コロンブス航海誌』(1992); 林屋永吉訳 岩波文庫 570.

(1997年3月)